

歴史が動いた「ベルリンの壁」崩壊

■新編集講座 ウェブ版 第137号 2019/12/1

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

東西冷戦の象徴と言われた「ベルリンの壁」が崩壊し、この11月でちょうど30年になります=図①と注②参照。私は当時、大阪本社整理部（現・編集制作センター）の若手編集者として紙面作りに関与。紙面扱いや見出し表現について、部長やデスクの判断に多くを学びました。硬派（1面や国際面、経済面など担当）デスクだった相原正弘さん（故人）の記録から抜粋引用します。

■ もはや東も西もなく

整理部にいると、歴史が動いた、世界が地殻変動を起こしている、と実感することがある。ベルリンの壁崩壊はそんな事件の一つであった。

「ベルリンの壁を含む全国境を開放する。国民は、いかなる外国へも出国できる」。1989（平成元）年11月9日午後6時58分、東ドイツのギュンター・シャボフスキー政治局員がテレビの生中継で突然こう発表した。東ドイツ市民、特にベルリン市民は耳を疑った。初めの数時間、人々は国境に向かおうとしなかった。しかし、この発表が本当だと確信できた瞬間から、人々は歓呼の声をあげ、笑い、そして泣いた。ブランデンブルク門=図③=の上では、東と西の見知らぬ者同士が肩を抱き合い、踊り狂った。もはや東も西もなく、ドイツが一つとなって、「戦後最良の日」に酔いしれた。待ちに待った自由を手し、何万何十万の東ドイツの人々が「Reise（ライゼ、旅行）、Freiheit（フライハイト、自由）」とロズさみながら、西に向かって大脱走を始めた。そのころ……。

■ どんな新聞を作ればいいのか

日本は11月10日の朝を迎えた。夕刊番で午前9時ごろ入社すると、東京整理部硬派デスクから「ブランデンブルク門がおかしい。人が行き来している」との電話が入った。ベルリン市民同様、一瞬耳を疑った。

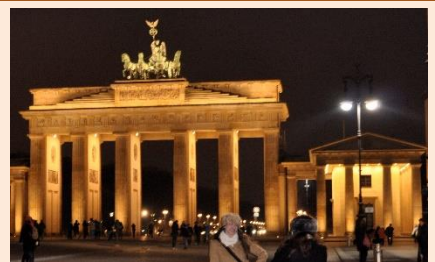
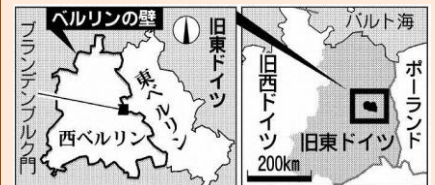
確かにここ数か月、東欧やソ連（現ロシア）で民主化のうねりが最高潮に達し、東ドイツでも市民が大挙してハンガリー経由で西ドイツに流入するなど予兆はあった。しかし冷戦のシンボルで、ヤルタ体制（米ソを頂点とする第二次大戦後の世界秩序）の橋頭堡（きょうとうぼ）である壁が一夜のうちに崩壊するはずがない。20年近く前に訪れた時もそうだったし、今も監視兵の銃口が逃亡者に向けられているはずだ。なぜ人が往来できるのか。ペレストロイカ（改革）を進めるゴルバチョフ（当時のソ連最高会議議長）が壁開放までやろうとしているのか。疑問が走馬灯のように駆け巡った。

まさか、と思いつつも、壁崩壊が本当ならどうという新聞を作ればいいのか。用意を整えておかねばならない。頭に血が上る。整理部デスクが孤独を痛感する時だ。時間だけが過ぎていくが、確たる情報が入ってこない。

→相原さんは、ドイツ語をたしなみベルリン訪問経験もある国際派。整理部デスクはかくありたいと、私は目標に決めました。



②ベルリンの壁 第二次大戦後、ドイツは資本主義陣営に属する西ドイツと共産主義陣営に属する東ドイツに分裂。その際、東ドイツに位置する旧首都・ベルリンも東西に分断され、西ベルリンは、東ドイツ領内における「西ドイツの飛び地」のようになりました（国際法上は特殊な地域だったそうです）。東ドイツ市民が西側に逃げるのを防ぐため、市内を分断する形で建設されたのが「ベルリンの壁」です=下図。



③ ブランデンブルク門。旧プロイセン王国（ドイツの前身）時代の1791年に完成した、ベルリンの象徴的な建造物です。このすぐ横に「壁」が構築され通行不能になったので、東西分断の象徴としても知られました。

■ 他紙の追隨を許さぬ紙面

1時間ほどたって1枚の写真が届いた時、あらゆる疑念が吹っ飛んだ。国境開放に躍り上がって喜ぶ東ドイツの若いカップルの写真だった。顔には満面の笑みを浮かべ、しっかり抱き合っている。その姿はまぎれもなく壁開放の事実を、自由を得た喜びを伝えていた=図①と④。

整理部が戦場が変わった。泊まり明けが号外に取りかかる=図①。硬派は1、2、3、4面、軟派(社会面)も見開きにした=図④~⑦。万が一のために呼び出しをかけておいた硬派部員も入社してきた。フィーチャー面(文化面や生活面の担当者)からも応援を得て、紙面制作の準備は整った。

しかし、材料がない。早版は調査部から保存写真を取り寄せ、ボン特派員や外信部の数少ない原稿でしのいだ。逃亡する市民を壁から引きずり降ろす東ドイツ兵や、「Ich bin ein Berliner(イッチ・ビン・アイン・ベルリナー、私は1人のベルリン市民だ)」との名演説で精神的にドン底にあったベルリン市民を狂喜させたJ.F.ケネディ(米大統領)=図⑧=など貴重な写真も含まれていた。遅版は記事、写真とも充実したが、整理部の真価を問われる見出しは、早版からツボを押さえていた、と思う。

「ベルリンの壁開放 東西冷戦のシンボル消滅」「自由への渴望28年、鉄のカーテン溶かす」「ベルリン賛歌 民衆の願い政治を超え」と大見出しが踊り、「外国旅行を自由化 歓喜の出国始まる」「変わる東西の枠組み ヤルタからマルタへ」「残るは38度線」とサブ見出しが続く=注⑨。

一面見出しは2段ぶち抜き、写真も天地8段で喜び合うカップルをカラーであしらい、壁崩壊がもたらす歴史的意義を伝えた=図④。質量ともに他紙の追隨を許さぬ紙面だった。

■ あの「最良の日」はどこへ

1989年。昭和天皇崩御に始まり、30年ぶりの中ソ和解、天安門事件、東欧における共産党一党独裁の終幕と続き、年末には米ソがマルタで東西冷戦の終結を宣言、戦後に終わりを告げた。だれもが予想しなかった方向に事態は推移した。東ドイツ市民の自由への渴望がそれだけ強かった、ということなのだろう。

「最良の日」から4年。ドイツは統一(90年)からくる経済不振に陥り、失業した若者が外国人排斥を続ける。ナチスによるユダヤ人迫害まではいかないにしても、「いつか来た道」の悪夢だけはもう見たくない。

→本稿は93年の執筆。当時のドイツでの外国人排斥に触れていますが、残念なことに、今も難民排除の風潮があります。相原さんの先を見通す「目」に驚かされるとともに、こうした力の支えがあってこそ、扱いや見出しに優れた判断ができた、と感じます。



④ 89年11月10日毎日夕刊1面(大版)。見出しや写真を最大限で扱ったのは整理部デスクの好判断です。



⑤ 同じ日の東京本社版1面。見出しに「事実上」を入れ、二番手に別記事を組むなど、弱い扱いです。



⑥ 同じ日の大阪本社版の社会面。整理部長が「世界史的な大事件。社会面も見開く」と決断。大阪社会部に、在日韓国・朝鮮人の取材を指示するなど編集を主導しました。



⑦ 同じ日の東京本社版の社会面。「ベルリンの壁」を社会面トップで扱っていますが、第2社会面(右面)に別の記事を入れているため、迫力を欠くのは否めません。



⑧ ケネディ米大統領の「ベルリンの壁」視察を伝える63年6月27日毎日朝刊1面(東京)。

⑨ 見出しの表現 「鉄のカーテン」や「ヤルタからマルタへ」など、今やなじみのない表現かもしれませんが、30年の歳月を感じますが、「38度線」は分断が続いています。